

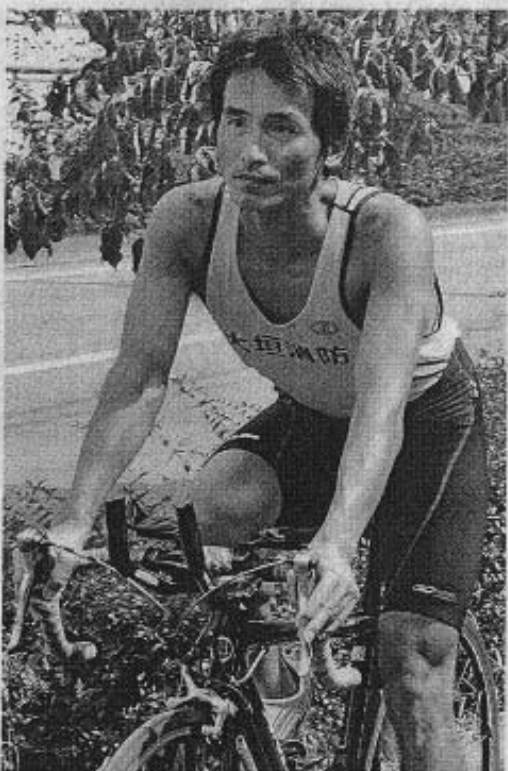
鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン 四半世紀

「厳しい暑さの中で競うトライアスロンで獲った体力と精神力が、仕事にも役立つ」と大垣消防組合職員の豊田栄二さん(47)は、トライアスロンを「生活の一部」と言い切る。

消防士として、救急活動や火災現場の第一線に立つ。同組合の特別水難救助隊長も務めているため、日ごろから体力強化が欠かせない。仕事の合間に、水泳や駅伝、マラソン大会への参加を続けてきた。長良川国際トライアスロン大会の存在はテレビで知り、一九九九年の第十四回大会に初出場した。仕事柄、「体力には自

豊田栄二さん(47) 大垣消防組合職員



「トライアスロンは生活の一部」と、大会に向けて練習に励む豊田栄二さん＝大垣市で

たぎる熱「今回が勝負」

信があった」と臨んだ大会。慣れないバイクで失速し、お年寄りや女性選手にも次々と抜かれた。

「最下位に近い順位」といふ結果。かさず続けて実力を磨き、水でスィムは実施されな

▶ 5 ◀

に衝撃を受けたが、幅広た。い年齢層で楽しめる競技の奥深さに触れ、夢中になった。

初出場で味わった屈辱感が、トライアスロン選手と一緒競技を楽しんだという。

「三種類目やってよかった。」「三種目やってこそトライアスロン」と意気込み「今回が本場の勝負。地元選手として結果を残し、大会を盛り上げたい」と、練習も熱を帯びる。

に入りつつあるが、究極の目標はまだ先にある。

「二十五年後の第五十回大会で、三世代出場を果たせたら最高ですね。地元の方々が、盛り上げを支える素晴らしい大会だから」。自宅に並ぶ親子一緒に競技写真を見つめ、日焼けした顔でほほ笑んだ。

(志村拓)